

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	土井 綾子
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 Clinical Utility of Geriatric Assessment Tools in Older Patients with Gastrointestinal Cancer (高齢消化器がん患者における高齢者機能評価ツールの臨床的有用性)
	掲載誌 Frontiers in Oncology 2023;13:1110236
	主査 大平 善之 副査 民上 真也 副査 前畑 忠輝
[論文の要旨・価値] Geriatric 8 (G8)と Instrumental Activities of Daily Living (IADL)は高齢がん患者の全生存期間(Overall Survival:OS)や重篤な有害事象(Serious Adverse Event: SAE)の予測に推奨される高齢者機能評価(Geriatric Assessment: GA) ツールであるが、低栄養を伴う消化器がん患者における臨床的有用性についてはあまり知られていない。申請者らは高齢消化器がん患者において、G8 と IADL の臨床的有用性を評価するため、臨床経過との関連を調査した。初診時に G8 評価を行った対象は、65 歳以上の消化器がん患者 207 名（年齢 75 歳）で、大腸がん 52.2%、膵臓がん 29.0%、胃がん 18.8%、うち切除不能の進行がん 56%で、69%(143 例)で化学療法が施行された。G8$\leq$14、IADL 満点以外を異常とした。高齢消化器がん患者の G8$>$14 の正常割合はわずか 6.8%で、他のがん種を含む既報(18.2%)と比べて非常に低かった。特に胃がんは低栄養な場合が多く、大腸がん(10.2%)や膵臓がん(5.0%)より G8 正常割合は低く(2.6%)、消化器がんでもがん種によって G8 の正常割合が異なる可能性が示された。ROC 解析により、高齢消化器がん患者における最適な G8 カットオフ値は 11 であり、G8$>$11 で有意に OS が長かった(中央値 19.3 か月 vs 10.5 か月)。高齢消化器がん患者では従来のカットオフ値である 14 で SAE や OS に差はなく、11 が予後予測に有用であった。IADL の正常割合は 51.7%で、化学療法群で正常割合が有意に高く、切除不能進行がん 92 例において、IADL 正常群は異常群に比べて有意に OS が長かった(中央値 17.6 か月 vs 11.4 か月)。 G8 カットオフ値 11 と IADL を組み合わせて両方異常(グループ 1)、片方異常(グループ 2)、両方正常(グループ 3)の 3 群に分け、臨床経過との関連を探索的に調査した結果、グループ 1 で化学療法の施行割合が有意に少なく(グループ 1:42.4%、グループ 2: 77.6%、グループ 3: 84.9%)、切除不能進行がんの 92 例では、グループ 3(24.0 ヶ月)、グループ 2 (13.8 ヶ月)、グループ 1 (10.7 ヶ月) の順で有意に OS が長かった。以上より、低栄養を伴う高齢消化器がん患者の臨床経過の予測に従来の G8 カットオフ値 14 は有用ではなく、G8 カットオフ値 11 と IADL の組み合わせが OS 予測に有用である可能性を示した価値ある論文であると考えられた。	
[審査概要] 学位審査は、令和 5 年 1 1 月 9 日午後 3 時よりおよそ 1 時間、医学部本館大学院講義室において指導教授の陪席のもと行われた。申請者から研究内容についての 2 0 分程の発表を行った後、内容について質疑応答が行われた。発表内容は簡潔にまとめられており理解しやすいものであった。副査及び主査からの研究の目的、方法、結果の解釈、今後の研究の展開に関する質問に対し、申請者は常に真摯な態度で対応し、いずれの質問に対しても的確に返答していた。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 英語の読解力については、引用文献の一部の和訳により判断した。本審査を通して申請者は十分な研究能力、専門的な学識、英語読解力を有すると判断できた。以上より、申請者 土井 綾子 氏は学位授与に値すると判断した。	